

巻頭言

ニューノーマルを見据え教育を考える

神戸学院大学 小川 真寛

この巻頭言を書いている今、3度目の緊急事態宣言が解除されたばかりである。ゴールデンウィーク前から2か月に渡って続いたオンデマンド授業がようやく終わりを迎えた。この巻頭言が読者の皆様に届く頃には果たしてどうなっているだろうか。オリンピックの観客は？第5波は？ワクチンの接種状況は？今のニュースではこれらのことが盛んに話題になり、専門家を含めて多くの人が予想をしようとしたとしても、ここからの数か月でもなかなか見通せることばかりでない。

私は作業療法の世界を歩み始めて、もう少しで四半世紀が経とうとしている。その頃から考えると全く見通せなかった事態が今は起こっている。今まで概念すらなかった在宅勤務や自宅からのリモート授業、研修会や学会の参加など過去10年位前を思い返してもその頃に考えたことのなかったことがこの一年で新常識になった。いわゆるニューノーマルである。コロナが終息したとしてもこのニューノーマルはある程度長所を残して引き続き継続しているだろう。このように、今後も予測できない変化が起り続ける時代が続くであろう。

私の学生時代を思い出すと、真面目でない学生だった私は何とか単位を取り、進級に必死で、教育なんて考えることは全くなかった。しかし、現在に至っては作業療法士として、教員として教育を学ぶことの必要性を強く感じるようになった。そもそものきっかけは回復期病院で管理職になり新人や若手がごった返している現場での教育の重要性に気が付いた経験からであった。この時の意識改革は私にとっては今ではニューノーマルとなった。本号には奇しくも私の指導により教育について学び研究したゼミの学生達の論文が掲載された。この調査を通して学生達はプリセプターシップ、クリニカルラダー、メンター、クリニカルクラークシップなど、多くの教育用語を学んだ。こういった知識は学生が今後の専門職として成長していく上でも重要だろう。今後は養成校での教育についての教育もより重要になってくるだろう。こういったことも徐々にニューノーマルになるかもしれない。

作業療法教育のニューノーマルは他の点でも進んでいる。私が学生だった頃の常識であった実習は睡眠時間を削って頑張るもの、私が新人だった頃に常識であった職場ではすぐに独り立ちで必要な勉強は自ら主体的にすることという常識はなくなりつつある。様々に世の中が変化していく中で、養成校の教員としても教育を学ぶという機会を大事にしなければならない。この1年半はオンライン授業、リモートでの試験、学内実習等、新型コロナウイルス感染症が拡大して、今までにない形態の教育が発展した。まだまだ学びは尽きない。新型コロナウイルス感染症が終息した後もこれらで学んだことを活かしながら、今後現れるであろう新しい教育の価値や方法を学び、アップデートされ続けるニューノーマルを見据え教育を考えていきたい。